
機動戦士ガンダム0083 もう一つの星の屑

大根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム0083 もう一つの星の屑

【Nコード】

N4459Y

【作者名】

大根

【あらすじ】

連邦軍の落ちこぼれ兵士ランドは、ガンダム試作二号機の奪取に、偶然にも居合わせてしまったことで、宇宙世紀の闇に消された。

『デラーズフリート』

の反乱に、巻き込まれていくことになる。

トリントン基地強襲直前（前書き）

エーッと、新作で、偉そうなタイトルを着けていますが、内容は屑です。

風邪を引きながら書いたのでかなり間違いが有ると思いますので、良ければ、ご指摘、アドバイスをして頂ければありがたいですm（

）m

トリントン基地強襲直前

〔第一部〕

雄大に広がるオーストラリア大陸

しかし、その雄大さには、会わない物がその大地のあちらこちらに突き刺さっている。

モビルスーツは愚か、戦艦よりも巨大な破片。

一年戦争において、ジオン公国が行った、コロニー落とし。

『ブリティッシュ作戦』の傷痕である。

かつてコロニーが落ち、オーストラリアの首都、シドニーが丸々消え去った場所。

直径100kmにも及ぶ、最大の人口のクレーター

かつての面影を全く残していないそこで、幾つかの影が破片の周りを飛び交っている。

?????1「あ、当たってくれ！」

気弱な声と共に、ザクからマシンガンが発射される。

目的は、前方のジムタイプだ。

しかし、ジムタイプは、空に飛び上がり、降下しながらマシンガンを撃ってくる。

?????1「う、上からー!!」

立体的なその動きについていけず、マシンガンがザクに当たる。しかし、ザクは被弾もせず、ピンク色のペイントが着くだけだ。

実戦なら、確実に撃破されているであろう。

「????2「おいおい。新兵さんは士官学校でお勉強をしなかったのか????」

ふざけたように言う低い声が響き、ジムタイプは攻撃をやめる。

「????1「クッソー！まだ勝負は着いてませんよ！」

ザクは、マシンガンを構え、ジムタイプに突っ込んで行く。

「????1「48・・・49・・・50・・・終わったあああゝ！」

そう言いながら、腕立てを終えた若い男は、地面に突っ伏す。

「????2「ランド。もうへばってんのか？」

そこに、低い親父声が響く。

ランド「カレント隊長！だ、大丈夫ですよ」

カレントと呼ばれた中年の男性は、やれやれと言いながら、去っていった。

ランド「クッソー！後少しだったのに！」

模擬戦でカレントに負けたランドは、罰として、腕立てをさせられ

ただ。

?????「ランド。お前また隊長に負けたんだろ!?ざまあねえな。」

男は笑いながら、未だ地面に突っ伏しているランドを嘲笑う。

ランド「アストン!う、うるさい!お前だって隊長に勝ったことな・
・あるか・・・」

ランドは、強くいかけたが、直ぐに言葉を濁してしまふ。

アストン「俺様はエリートだからな!落ちこぼれランドよお」

徹底的に罵倒してくるアストン

ランド「ぐぬぬぬ・・・何も・・・言えない・・・」

事実を言われランドはさらに塞ぎ込んでしまふ。

アストン「じゃあなあ〜!落ちこぼれ醜男ランド〜。俺はこれから
これなんだよ?」

アストンは、小指を立てながらゆっくりと去っていった。

ランド「くそう・・・好き勝手言いやがって!」

2人の因縁は、士官学校時代まで遡る。

アストンは、代々軍人の家系に生まれた。
さらさらの金髪に甘いマスク、モビルスーツの操縦も一級品で、性格意外はパーフェクトといってもよい男だった。
士官学校を首席で卒業。
将来を約束されたエリートだった。

それに引き替えランドは、普通の家に生まれた次男坊。
黒い髪も適当に耳の辺りまで、切っただけ。

元気はあり、モビルスーツの操縦もそれなりに出来るのだが、いざと言う時何も出来ない。

要するにヘタレだ。

顔はそれなりにイケメンで優しい性格をしているが、お洒落等には興味が無く。女性に全くモテない灰色の人生を送っていた。

士官学校を落第すれすれで卒業した、『落ちこぼれ』である。

この2人は、オーストラリア、トリントン基地でテストパイロットとなる。

エリートと落ちこぼれ。両極端な2人が会うはずが無く、アストンは、何かとランドを見下しては鬱憤をばらしていた。

以上が、ランドとアストンの因縁の経緯である。

ランド「・・・帰るか・・・」

ランドは落ち込みながら、宿舎へと向かうのだった。
????? 「見るよキース。ペガサス級だぜ！」

キース「コウ。言われなくてもわかってるよ。」

すると。途端に辺りが騒がしくなり、光が遮られる。

ランド「な、なんだ！」

ランドはあわてて振り向き、言葉を失った。

空には、巨大な戦艦が浮かび、いままさに降りて来るところであった。

ランド「嘘だろ・・・ペ、ペガサス級！」

かつて、連邦の白い悪魔を載せていた艦と、同じ系列の艦が、ランドの前に降り立ったのだ。

コウ「おい、キース！見に行ってみようぜ！」

キース「マジかよ！？・・・わかったよ！」

コウと呼ばれている黒髪の青年と、キースと呼ばれているメガネの青年が、降り立って来た戦艦に行こうとして、ジープに乗る。

ランド「あ、待ってくれ。おれも載せてってもらえないか？」

ランドも居ても立ってもいられず、2人に話しかける。

コウ「別にいいぜ」

キース「お前も物好きだなあ」

ランド「サンキュ・・・よし、いいぞ。」

ランドはジープに乗り込む。

コウ「よし、じゃあ行くぞ」

コウは、3人を載せた。ジープを戦艦に向かって走らせた。

トリントン基地強襲直前（後書き）

相変わらずの駄文ですいませんm(_____)m
前作でご指摘を頂きましたが、作者の技量不足により、全く進歩していません。

ランドは、アルビオン隊に入れるつもりなので、強引にコウヤキースと絡みを入れていますがそこは許してくださいm(_____)m
アストンは・・・どうしましょうか？

勢いで書いてしまいましたので(.....)

何かよいアイデアがあれば、よろしく願いますm(_____)m

ガンダム強奪(前書き)

更新遅れてすいませんm()m
達の悪い風邪でした？

相変わらずの駄文ですが、良ければ、コメントお願いしますm()m
m()m

ガンダム強奪

ガタガタと音をたてながらジープがペガサス級に乗り上げる。

コウ&キース&ランド「……………」

3人は言葉を失った。

目の前には、伝説とまで言われた、ガンダムタイプのモビルスーツがたっていたからだ。

コウが一番に口を開いた

コウ「やっぱりガンダムだ……」

キース「あ……お、おいコウ！見るよ！」

そう言ってキースが右の方を指差す。

コウ「ガンダムが2機も!!」

そう言って2人はジープを降りて、ガンダムに近づく。

コウ「こっちはコアファイター付きだ。あっちのも凄いな。見ろよあの重装甲」

キース「見れば解るよ」

ランド「……………」

ランドは呆然としながら、それを見ているしか無かった。

すると、キースがメカニックらしき女性に声を掛け、言い寄っていき。

コウは相変わらず、ガンダムにご執心だ。

ランド「（キースって言ったっけ・・・手が速いなあ・・・デカっ！なんだあの人！大の男よりデカイぞ）」

キースが大きい女性に絡まれている。キースと並んで、頭一つ以上大きいだろう。

ランド「（あ、負けた。キースなんか凹んでる）」

どうやらキースは惨敗したようだ。

ランド「なんか和むな」

人の不幸は蜜の味、というやつだ。

キース「コウ・・・帰るぞ」

コウ「待てよ。もうちょっと見てようぜ！」

キース「俺はご傷心なんだよ。」

2人がジープに向かって来る。

ランド「んっ？、ジムタイプか？」

2機のガンダムの向こうに、1機のジムタイプが見える。

ランド「(デカイバックパックだな……)」

一見パワードジムに見えるが、何かが違う。

ランド「(何なんだ、あの機体?どこか……)」

キース「コウ、帰るぞ」

コウ「わかったよ……そう言えば君は……ランド……で、合
ってるっけ?」

コウがランドに向かって聞いてくる。

ランド「ああ、あってるよ。ランド・シュバイツ。階級は准尉だ。
お前らはコウとキースだっけ?」

一応3人とも、同期なので、名前は知っているようだ。

コウ「ああ、俺はコウ・ウラキ。階級は少尉。呼び方はコウでいい
ぜ」

キース「俺の名前はチャック・キース。同じく少尉だ。キースって
呼んでくれ」

同期だが、あまり面識は無かったようだ。

ランド「ああ、改めてよろしくな。取り敢えず、夕飯に行くか?親
睦を深めるのも大事だしな。」

辺りはそろそろ暗くなって来た。

コウ「そうだな。同期同士仲良くしようぜ。」

キース「腹も減ったしなあ。行くか」

そう言っで、3人は夕飯へと向かうのだった。

コウ「人参要らないよ・・・うえっ」

コウが食事をとろうとする。人参はたくさん入れられたようだ。

ランド「子供かよ!」

ランドは思わず突っ込んでしまった。

キース「げっ!」

キースが何か行ったので、そっちを見ると、キースがあしらわれたメカニックの女性と、大きなメカニックがいた。

ランド「（確か、モーラ・バシット中尉と、ニナさんって言ったっけ）」

すると、コウがいきなり話しはじめた。

コウ「そつだ。ガンダムの反応速度は0・5、ぐらい早く・・・」

コウは何かぶつぶつと話している。

ランド「（二ナさんって、美人なんだけどなにかなく、コウも、何でそんな話しかないんだよ。）」

コウ「・・・それで、あの重装甲の奴は、対核兵器用で、肩のバズーカは戦術核装備だろ？」

二ナ「えっ！」

二ナは相当驚いている。

いきなり、見破られたからだろう。

ランド「核だつて!？」

ランドも驚いている。

核兵器使用は南極条約で禁止されているのだ。

ランド「本当なのかよ・・・あ、そう言えば、あのジムタイプは何なんだ？パワードジムとは何か違うし・・・」

モーラ「あれは、パワードジム改。パワードジムのバックパックをより、高性能のに変えて、装甲の一部をルナチタニウム製にした物。ガンダムにより近いデータをとるために、改良したのをジャブローから持ってきたのさ」

そうモーラは説明をしてくれる。

ランド「へえ、なんか凄いな。」

モーラ「確かにね。手間のかけ方が半端じゃないね。二ナ、いこうか。」

そう言っつて、二ナとモーラはどこかへ言っつてしまった。

ランド「ジャブローも随分金つかつてんだな。」

キース「確かに、あんなに手間かけるなんてな。けど俺たちには関係ないさ。」

コウ「まあな。新型は多分、バニング大尉がアレン中尉が乗るんだろ?」

ランド「あの2人が基地の1番と2番だからなあ。まあ良いや。さつさと食おうぜ」

3人は取り敢えず、夕飯を食べる事にしたのだった。

コウ「なあ。もう一回ガンダムを見に行こうぜ。」

夕飯の後片付けをすませると、コウがそんなことを言っつてきた。

ランド「またかよ。まあいいけど」

キース「俺は勘弁しときたいんだけどな・・・わかったよ」

3人は再び、ペガサス級へと向かった。

その頃、基地に一台の車が入ってきた。

これが、未曾有の大惨事の始まりになるとは誰も、思いもしないのだった。

キース「あれ、なんかやつてるみたいだな？」

重装甲のガンダムに、メカニック達が、何か作業をしているようだ。

二ナ「あなたたち！ここは立ち入り禁止のはずよ！」

3人は二ナにばれて案の定怒られてしまった。

コウ「もしかして今、弾頭装備中なのかい？」

コウが大声で、二ナに訪ねる。

二ナ「ええそうよ。だから邪魔にならないように、出てって頂戴！」

そういつて、二ナは作業に戻ってしまふ

キース「彼女、あのトゲトゲがなけりゃ最高なんだけどな」

ランド「激しく同意」

コウ「もう諦めるよキース。嫌われてるぜ。ハッキリ言って」

キース「わかってるよ〜んなこた。帰ろ〜帰ってやけ酒付き合えよな！」

コウ「さてよ。もう少し良いだろ」

キース「だ〜めだ。」

ランド「（不味い・・・）じゃあ、また明日。」

何かを感じ取ったランドは早々に逃げようとする。

キース「さて〜にげるな。お前も来るんだよ〜。同期だろ」

コウ「わかったよ。ランド、お前も道連れだ。行くぞ」

しかし、あっけなく捕まってしまう。

ランド「うえ〜、わーったよ」

こうして2人は、キースのやけ酒に付き合う事になった。

コウ「あっ！」

前方から、上官らしき士官が歩いてくる。

ザッ

と3人とも敬礼をする。

すると、向こうも敬礼で返してくる。

ランド「（見たことない人だな？ペガサス級の人か？）」

????「素晴らしい。見事なモビルスーツだ」

コウ「自分もそう思います」

コウは生真面目に、そう答える。

????「君？バズーカに弾頭の装備はすんでいるのかね？」

コウ「は、はい？」

????「では、試してみるか・・・」

そう答えると、士官は、ガンダムタイプのコックピットへと登って言った。

ランド「????」

しかし、もう遅かった。

二ナ「まったくあの3人今度はまた何かやり始めたわ・・・あなっ
！はあっ！」

振り向いた二ナは、驚愕した。

ガンダムタイプのハッチが開き、士官が中に入ろうとしていたのだ。

二ナ「何してるの!!!ハッチを閉めて降りなさい!!!」

すると、士官は振り向いて

????「フッ」

と言って、ガンダムタイプに乗り込んだ。

二ナ「誰よあれ!!!」

二ナは、いてもたってもいられず、ガンダムタイプのところへと向かった。

コウ「なんだ?」

キース「どうした?」

ランド「こりゃやばいって!!!」

すると、2号機は、ケーブルを千切り、動き出した。

二ナ「誰かつ!誰か2号機を止めて!!!」キース「なんだ?なんだ?」

ランド「嘘だろ!こんなの」

コウ「くっ!!!」

キース「お、おいコウ!!!」

すると、コウはもう一機のガンダムに向けて走り出した。
そして、ガンダム1号機のハッチをあける。

モーラ「ウラキ少尉！他の人を呼ぶわ。あなたじゃー！！」

コウ「僕だってパイロットだ！」

モーラ「今救弾中よ。すぐには出せないわ。」

コウ「急いでください」

二ナ「2号機のパイロット。聞こえてるでしょ？今すぐに降りれば、罪は軽いわ！今すぐに降りなさい！」

????「この機体と核弾頭は頂いていく。ジオン再興のために！」

このモバイルスーツデッキにいた全員が驚愕した。

二ナ「っ！？」

コウ「ジオンだと!？」

2号機は、ビーム・サーベルを使い、ペガサス級のハッチを切り裂き、飛び出した。

キース「嘘だろ！俺は大尉のところに行くてくる。ランド！行くぞ
！」

ランド「キース・・・先にいっててくれ・・・俺はこいつで出る」

ランドはそういって、パワード・ジム改を見上げた。

キース「えっ！わかったよ。わかりましたよ。俺1人で行くよ」

そういって、キースはジープで飛び出した。

すると、1号機も歩き、ハッチを飛び出す。

ランド「こいつは動きますか!？」

モーラ「貴方まで!?!?! 救弾はすぐ済むわ!」

ランド「わかりました」

ヒュルルルルルル………

……

チュドドドドドドドドドド

チュドドドドドドドドドド

ドドドドドドドドドドドド

キース「今さらジオンが何しようってんだよお〜!」

基地一面に、ミサイルが降り注ぐ。当たり一面は、とても、終戦しているとは思えない惨状だ。

連邦兵士「カークス、キース急げ！」

バニング「模擬戦じゃないぞ！みんな気を引き締めて行け！」

キース「大尉！ジオンが核弾頭装備の2号機を奪って行きました！」

カークス「ジオンだと！あいつらまた戦争をやる気なのか！何人殺せば気が済むんだよ！」

バニング「いそぐぞ！」

そういつてパイロット達はモビルスーツに乗り込む。

ガシヨン

パワード・ジムが格納庫から飛び出す。

すると、そこへ、バズーカが飛んでくる

アレン「！？」

パワード・ジムは、間一髪で避ける！

後続のカークスのザクがマシンガンを構える。

カークス「うわあああああー」

マシンガンをめちやくちやにうち始める。

ドムが迫って来ていたからだ。

しかし、手練れのパイロットにそんなものが通じるわけもなく、胴体を一閃され、地面に倒れる。

キース「あ、あ、あ」

キースは実際の戦場を目の当たりに、震えていた。

????「ゲイリーか！作戦成功だ脱出する」

コウ「ここから出すわけにはいかない！」

すると1号機は、ビーム・サーベルを構え、2号機の前に立ちふさがった。

連邦管制官「基地北東より、別部隊確認、残った部隊は至急、指令部の防衛に当たられたし」

モーラ「増援！そんな馬鹿な！」

基地の北東にみすみす侵入を許してしまったのだ。

ランド「コウ・・・2号機を頼む・・・俺は、指令部の防衛に出ます！」

そして、パワード・ジム改は、トリントンンの激戦の中へと飛び出した。

ガンダム強奪（後書き）

えーっと・・・原作のままです？

このあとはランドの戦闘なので、ちよつと展開を置えます。

強襲部隊の別動隊を登場させたり、キンバライトには、まだたくさんのモビルスーツがある。などです。

あと、カークスは生きてるかもしれないやられ方にしたつもりなので、何か意見あれば、お願いしますm(____)m

今、薬を飲んだので（睡眠導入剤）頭がおかしくなってます。

批判などはどうぞご自由をお願いしますm(____)m

その文だけ、自分の力になりますのでm(____)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4459y/>

機動戦士ガンダム0083 もう一つの星の屑

2011年11月18日02時39分発行